



A TREASURY OF JAPANESE LITERATURE

日本の文学

37

横 光 利 一

中央公論社

横 光 利 一

昭和41年4月25日初版発行

昭和48年7月30日11版発行

発行者 山 越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 株式会社トープロ
色刷口絵印刷 株式会社大熊整美堂
口絵写真印刷 株式会社トープロ
本文用紙 本州製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製本 協和製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

悲しみの代価	9
蠅	63
日輪	68
静かなる羅列	122
春は馬車に乗って	130
花園の思想	141
上海	156
機械	308
寢園	328

時間	微笑	注解	年譜	口繪	挿画
453	468	493	508	524	
		川端康成		佐野繁次郎	佐野繁次郎
				「寢園」	「日輪」「上海」「寢園」

横
光
利
一

悲しみの代価

一

彼は窓の敷居に腰を下ろして、菜園の方を眺めていた。「あなたお湯へいらっしゃる？」と妻が勝手元から、訊いた。

彼は黙っていた。近ごろことに彼は妻が自分の妻だと思えなくなつて來ていた。

妻は小さな金盥かなぐらいを持つて彼の傍へ來た。

「いらっしゃらないの。」

「ああ。」

「私さきへ行つてくるわ。」

妻は室を出て行こうとしたとき、また彼の方を振り返つた。

「三島さんはまだお歸りにならないでしょうね。」

「もう歸るだろう。なぜだ？」

「大久保の方を廻るつておっしゃったわね。遅おそくなるわ

よ、きつと。」

妻は室を出てゆくと下駄げたを履はくらしい音をさせながら、「ちよつと、ちよつと、七輪を見て頂戴な。御飯がしかけてあるのよ。忘れちゃいやよ。」とまた言つた。

三島がいい家が見附からなくて、彼の家へ來てからは妻の辰子がにわかに華はなやかになつて來たのを彼は感じていた。

今も彼は、自分を意識してよりも三島の歸りを頭に描いて湯に行く妻をはつきり感じると、彼の心はまた急に曇つて來た。しかしそれよりも彼は自分の心が三島から放れて行きつつあるのを知つて恐ろしくなつて來た。彼が辰子を妻に持たないまではかなりたくさん友達を持つていた。それが二年とたたない間に三島ひとりを残してほとんどすべての親しい者を失つた。それは彼から放れていったのかそれとも親しかつたすべての者が彼を見捨てていったのか？ 彼はそれを考えるたびごとに、妻が心を閉いめかせている友達に対しては彼から少くとも放れて行こうとした態度をとつてきたことだけは否いなめなかつた。そうしてその中に友人の間で彼のそうした態度が評判になり始めると彼のところへと来るものが一人一人と減つて來たのにちがひなかつた。彼は幼い時ある易者にみてもらつたことがあつた。その時易者は彼の足の裏を眺めていて、この子には友達が出来ないと言つたこ

とを彼は覚えていた。それが何の理由か長い間不安なまま彼には分らなかった。が、今彼にはその理由が分ったように思われた。しかし、その不思議な謎が、妻の辰子の媚弄な性格と彼の小心な性格との組み合わせの中に潜

んでいたのだと思うとなお彼は恐ろしくなつて来た。それも初めのうちは、友達を失うことよりも、妻の心の対象が完全に自分一人に向つて来ることの方により

多く自分の幸福を見出すであらうと思つていた。だが、はたして自分はすべての者を失つてまで妻を完全に所有しなければならぬほど、それほど妻の辰子のどこに価値があるのかと彼は疑ひ出した。もし妻が真実に自分を愛しているなら、自分の苦痛に同感して慎しまねばならないはずなのだ。それに妻は？ 嘘だ！ とまた彼は思った。幾度考えても彼女と結婚したということが間違つていたように思われる。自分は妻の華やかな挙動に魅せられて彼女を愛し始めた。そうして彼女も自分の愛を感じて自分を愛したというものの、しかし彼女が

自分に示した愛は、彼女が自分の失った友人たちに与えた媚弄な挙動とどこも変つたものではない。ただ自分は彼らより二年早く彼女から媚弄な微笑を送られたということそのことだけで結婚が成り立ったのだ。してみれば今自分が彼女から身を退いたとしても、彼女は自分に代つた第二の良人の妻になることを新らしく着物を着変え

るようにしか思つていないにちがいない。彼はつねにも増して妻の存在が不愉快になつて来た。彼は空を見た。これは彼の癖である。

彼はいつか宇宙が十三万あると書かれた書物を見て以来、空を見るとその見たときに限つて、十三万の宇宙と人間とを比較しながら想像して自分を極度に輕蔑する氣になつた。

今も彼は空を見て自分の肉体も妻もすべての者を輕蔑し去つた自分の心だけが清く天上へ拡がってゆくような氣持ちがした。そうして彼のこの癖は彼が妻から苦痛を受けたときに限つていつのまにか自然と用いられる療法の一つになつて来ていた。が、まだこの他に彼の苦痛の療法は四種あつた。その一つは賑かな人通りの多い街路を散歩することである。街路で綺麗な好ましいたくさんな少女に行き逢うということはいつも彼にこれからさき自分の妻になる新鮮な娘が無数にあると思わせる。それは活氣を起させた。妻を厭う氣持ちからそれを感じれば媚弄な妻から受ける苦痛はかえつて彼には都合よくなつて来た。なぜなら、その時に限つて、新しい妻を求める理由の説明を一層強く自分に向つてすることが出来たから。

今一つはある定つたカフェーへ行くことである。しかしこれは臆病で自尊心の強い彼にとっては、あまりいい

ところではなかった。たまたま彼に好意を見せて来た女があつても、その女が他の客に示している好意を見るともう彼はその女が好きになれなかった。それよりも彼にはそういう場所で逢う女としては、全然彼に冷胆な綺麗な女の方がかえって気持ちよかつた。今一つの苦痛の療法は彼には一番気持ちが良いものであつた。それは、彼の行きつけているある古本屋へ行くことであつた。その主婦は彼が大学にいるころから彼を特別な客にしてゐた。彼がまだその店へ行き馴れないある日のこと、本棚の前で次の時間に必要な本を落して無くしていたのに気がついた。その時彼は「アッ」と小さく声を立てた。「どうなさいましたの？」と主婦は訊ねた。

彼は本のことを言ふと、彼女は黙つて本棚からその本をぬいてきて、「これを持っていらつしやいませ」と言つて彼に渡した。彼は時間が終むとその時その本を買うだけの金の持ち合せがなかつたのでその本をすぐ彼女に返そうとして持つて行つたが、彼女はまたやはり、前のように「持つていらつしやいませ。」と言つた。彼はその彼女の表情から音声から、商法的な手段としての不快さ、愛恋的な媚弄を少しも感じなかつた。それはたといその場合が彼でなくとも彼女はそうしたにちがいないであらうと思われる優しさだつた。そしてその彼女の優しさは、それは最初から彼ひとりの性質にわざわざ適合し

て造られたかのように思われるほど、それほど彼の心を温かく柔けた。

もちろん彼女とでも、時としては、至極静かな媚びを湛えて彼を迎えることはあつたが、それは彼の妻が近づく男たちの誰彼に対して振りまくそのように、対照に比例して変化させたり、またその効果を充分意識してするものとは全く違つて、自然に流れた自身の友人に向う媚びのように綺麗な静かなものであつた。彼は彼女に危険な欲望を少しも感じなかつた。そればかりでなく、彼女の前に出るということはむしろ彼の一切の欲望を圧伏させて彼の気持ちを一段と気高く、清く朗かなものに変えることがしばしばあつた。

けれども、そういう彼の幸福も間もなく彼からなくなつた。ある夜、彼はいつものようにいつもの時刻に本屋へはいって行くと、店の火鉢の中に置いて主人と主婦とが坐つてゐた。主婦は不気嫌そうな主人の前で俯向いて黙つてゐたが、彼を見ると急に少し顔を赧らめて会釈をした。彼は彼女の会釈からいつもと違つたある剛い感じを受けた。

「稲妻はまだ出ませんか。」

彼は主人を見ながら数日前に頼んでゐた本のことを聞いた。主人は彼には答えずに表の方を眺めてゐた。

「まだでございますの。」と代りに主婦は答えた。

「出ないのですね。なかなか。」

そう言つて彼は主婦を見た。主婦は俯向いて彼の眼をさけた。彼はそのとき、主人の不気嫌の原因を始めて感じた。そしてそれが自分のことで自分の来る前から二人の間に続いていたものだということもはっきりと感じた。彼は身が引きしまった。本棚の前を一度廻るとそのまま会釈を誰れにともつかずにして外へ出た。もう行かないと彼は思った。もう行けない、と思ったから。彼はしばらくして道の上に立ち停つていた。すると自分の心の中で主人に対して怒っている感情が最も高く動いているのに気がついた。

あの妻を持ちながら、どうしてそんな気持ちになるのか？ 彼は主人の気持ちに理窟なしに間違つていふと思つた。しかし、主人は妻に疑いを向けているのではなく、自分に向けているのかもしれないと思つた。「ばかな。」と彼はひとり言つた。が、あまり行きすぎた自分を考えとみると妻を愛していればいふほど疑いを持つ主人の方が正しく思われて来た。が、また、自分のいない時、主人の前で主婦が自分に好意のあるらしい気持ちを現わしたのかも分らないと思つてみた。そう思うと彼は急に今までと打つて変つた喜びを感じて来た。そしてもしそれが事実であるならば、もうそれで自分はたくさんだと彼は思つた。彼はその喜びを少しでも失わないように、何

か壊れ物を抱いている時のような気持ちで歩いていった。が、突然妻の辰子が、今自分の感じているのと同じ喜びをいやそれよりもっと強い自信を絶えず多くの男たちに感じさせて来続けたのだと彼は思つた。彼はにわかにまた一層妻が妻だと思えなくなつて来た。そして、自分の苦しめている本屋の主人の気持ちがそれだけはっきりと胸に映つて来ると、今さきに感じた自分の喜びは、汚いけしからぬ情の動きのように思われた。主人の疑いも自分に向けられていふことを彼は願つた。そして、再び本屋へは行くまいと決心したもの、しかし彼は何となく淋しかった。それからしばらく、一カ月ほど彼は本屋へ行かなかつた。が、ある日、彼は散歩から帰つて来ると、玄関の庭に妻あてになつた一封の書面が表を向いて落ちていた。彼は何心なくそれを拾おうとすると、急に不安な気持ちが胸を打つた。彼は延ばした手を引いて上から封書を見詰めていた。

「男からにちがいない。」そう思う疑いが、封書に書かれた見馴れぬペン文字から直覺的に強く感じれば感じるほど、彼はそれを拾つて裏返す勇氣がなくなつて来た。いや、見ても仕方がない。たとえそれが男から来た恋文であつたとしても、男の名前は書いてなからうし、また、よしそれがそうであつても自分はどうすることも出来ない。ただ出来るのは自分の苦痛を増すだけである。と思

うとそれよりも、彼はこの場合自分の自尊心を保つためにその手紙をそのままにしておく方が一番自分として助かるように思われた。

彼は書斎へはいった。思った通り妻はいなかった。が、しばらくして彼女は帰って来た。彼は妻がその手紙のことについて何か言い出すかと待っていたが、妻は彼の室へはいって来ずに筆筒の引き手をいつまでも鳴らしていた。

「おい。」

彼はやはり自分の気持ちを圧おさえていることが出来なくなった。妻は黙って彼の室の襖ふすまを開けると、

「もうすぐ御飯にしますわ。」と言った。

「手紙が来ていたろう。」

「ええ。」

「誰だ。」

「お友達から。」

「どこへ行ってたんだ？」

「あのう、お味噌みそを買かいに行いったの。」

「嘘うそつけ。」

「じゃ、あそこにお味噌があるわ。」

「手紙のことだ。貴様は嘘うそより言えない奴やつだ。」

「ほんとうよ。お友達からよ。見せましようか。」

「お前に友達なんて誰があるんだ。」

「そりゃ私にだってあるわ。」

「見せろ。」

彼が手を差し出すと妻は子供らしく、

「いや。」と言って次の室へ行こうとした。

彼は怒りに突き動かされて立ち上った。妻は逃げるように歩いた。

「破やぶいちゃったの。だってさ、いけないことが書いてあるんですよ。」

彼は妻を追うことをやめた。今ははっきりと彼女の秘密を意識した。妻は火鉢の傍まで行くと少し下顎あごを膨はらせた横顔を赧はらめて故意に落ち着き出した。それはとても手出しの出来ない不貞な感じであった。彼は室の中央に突き立ったまま、黙って妻の横顔を睨にらんでいた。が、突然、悲しくなった。

「まア見てくれ、これが俺の妻なんだ。」彼は自分と自分に肚はらの中で言った。眼がだんだん熱くなってきた。

「もう駄目だ。」

そう思うと彼はそのまま表へ出た。妻の相手の男が誰であるのか。一度はそう考えたと放れていったすべての友達らの顔が次々に浮んでは来たがしかしもうそれは誰であつてもまたそれはいつの前から続ついていても彼にとつては同じであつた。彼は妻から放れようと決心した。決心すると、それまでに放れていった友達らに対して済

まないと、思う心がしきりに動いて来た。彼らになした自分の一切の不愉快なことがらが、ことごとく不貞な妻から起つて来たといふものの、それらは皆自分のばかさからであつたのだ、と思えば思うほど、彼はその妻に今まで牽きつけられていた自分の身体が、ただ情欲の詰つた穢れた壺のように思われた。が、とにかく彼は今そのままではいられなかつた。何かしなければならぬ。酒を飲もう。いや酒では駄目だ。何かこうすてきに強い力のもので自分の頭を叩かなければ。彼は俯向いてただ無闇にせかせかと歩いてゐたが、その時彼は本屋へ行こうと心に定めた。それは家を出るとき真先きに彼の頭に浮んだことだつた、けれども前からもう行かないと自分に誓つてゐたそれだけ、はつきり行こうとは思わなかつた。しかし、もう彼は自分の苦痛を救つてくれるのはそこだけではないと思つた。ただ行けばよい、ただ彼女の顔を少しでも見ればよい。自分は彼女と良人の不和を今以上に増すようなことはしないであらう。そう思つて本屋の横まで来ると彼の胸は激しく音を立て始めた。彼は主人に見られることを何より恐れながら本屋の前を足早やに通つた。そのとき中を急いで見ると、主婦はひとり表の方のどこか一点をじつと見続けながら坐つてゐた。

彼は彼女がまだ彼に氣附かない前からちよつとおじぎをして通り過ぎた。通り過ぎてから彼は彼女が自分を認

めるまで大胆に彼女の方を見てゐなかつた自分を後悔した。しばらく行つてから彼は本屋の方を見た。すると、ちよつどその時本屋の中から彼女が彼の方を向いたまま出て来たところであつた。彼はすぐるりと向き返るとまた歩き出した。なぜそうしたのか彼は自分ながら自分の臆病さに愛想がつきた。が、彼は背中に彼女の視線を感じながら、振り向いてよいものかどうかとためらいつつ、も一方でなぜ彼女が自分の姿を見たと同時に出来たのかと考へた。――ああ俺は今喜びの頂点を感じてゐる。だが、しかし、彼女は頼んでおいた「稲妻」の出たのを自分に知らせるために現われたのかも分らないと彼は思つた。彼は後を向いた。彼女はまた門で彼を見詰めるながら立つてゐた。彼はまた、頭が下りかけたが、傍を通る人々に氣が働いた。もし「稲妻」が出てゐるからだとすると、何か一言報らせるはずだと思つた。しばらく歩くとまた彼は後を向いてみた。まだ彼女は立つてゐた。すぐ彼の頭は跳ね返つた。なぜ彼女は立つてゐるのか？ 彼女は俺を愛してゐるのだ！ だが、あの彼女が良人に隠れて俺を愛するとはどうしたことだ。彼は彼女に持つてゐた尊敬心が急になくなつたように思われた。いや、なぜ自分は喜んではいけなひのか？ それより彼はだんだん窮屈な感じに追われ始めるとまだ後を振り向く必要があるかどうかと考へたが、しかし、後を向いてみて、

彼女のいなくなつていたときの淋しさを想像するとそのまま足が動いていった。と、突然、彼は自分の帰つてゆく先に潜んでゐる暗い気持ちが生んで来た。

「ああ、もう俺は、あれにはたまらない。」と彼は思った。彼の歩みは弛んで来た。

「俺は、本屋へ行こう。俺は彼女を愛しているんだ。彼女も俺を愛しているじゃないか。それに、何を俺はぐずぐずしているんだ。ばかな！」しかし彼には彼女の良人の苦痛が想像されると、自分の罪の意識が一層明瞭に感じられた。彼は自分の中にある一切の道徳的な気持ちを今はことごとく踏み潰してしまひたかつた。が、それにもかかわらず再び本屋へ戻りたがる自分の欲望を締め縛ろうとする道義心をなお一層強く感じて来ると、彼はただ自分に反抗する気持ちばかりで自分に向つて叫び出した。

「よしッ、俺は彼奴の妻を奪つてやるぞ。苦しむ奴は苦しむがいい。苦しんで苦しんで、たえられなければ死ぬがいい。」

後に引き返えそうとして立ち停つた。が、足が動かなかった。

「行こう！」と彼は言つて元氣をつけた。が、やはり彼はそのままに立つていた。

「行こう！」とまた言つた。

彼は本屋の方へ歩き出した。彼女の姿はもう店頭から消えていた。彼は歩き出すと一歩ごとに不思議な力を感じて来た。それはいつもの静かな臆病な彼とは全く別な荒々しい彼であつた。そしてこれは、時折、彼が物事に行き詰つたとき、勃然として起つて来る遺伝的な狂暴性を持つた彼であつた。幼い時からこの彼が起り出すと、彼は事態の危険を識りながらも、その危険に身を投げつける癖があつた。彼はもはや、何の躊躇も警戒も感じずに本屋の中へはいつていった。

主婦は一人の客に釣り金を渡していた。客が帰ると彼女はちよつと彼を見たが、そのまますぐ火鉢の傍へ坐つて黙つて自分の膝へ眼を落した。彼はいつまでも動かない彼女の顔を見詰めながら立つていた。すると、何の涙か彼は涙が生んで来た。

「もう僕は参りませんよ。」と彼はしばらくして言つた。

主婦は初めて顔を上げた。彼は彼女の眼が潤んで光つてゐるのを見た。

「すみませんわ。」と彼女は小声で言つた。

「郷里へ帰ろうと思つています。」

「またいらつしやるんでございましょうか？」

「御主人はお宅ですか？」

「いいえ。あの、またいらつしやるんでございまして。」

う。」

「分らないんです。御主人にはすまないと思つています。」

「いえ、そうじゃございませんの。そんなことは何でもないんですの。お郷里の方に何かお変りがあるんですか。」

「別に変つたことつてないんですがね。」と彼は言つた。が、自分の口だけが気持ちから全く放れてひとり饒舌つてゐるのを知ると、突然、

「お免なさい。」と言つてお辞儀をした。

彼女は「まア」と言つたまま彼のお辞儀を黙つて眺めていた。彼は頭を上げると彼女を見ずに急いで外へ出て行つた。彼は彼女の家から離れれば離れるほど、だんだん昂奮がさめて来た。すると自分が彼女の前で言つた言葉の思い出した。

「事実俺はもう行くまいと思つてゐるのか。事実俺は郷里へ帰ろうと思つてゐるのか？」

そう考えると、彼は初めて、もう行くまいと思ひ、郷里へ帰ろうと思ひ出した。が、それは、彼女の前で、もう来ないと言ひ、郷里へ帰ると宣言したがためでは決してなく、それとは全く独立してこの時始めて彼の中に湧いて来た気持ちであつた。が、いよいよ、彼女には、二度と逢えないのだと思ふと、彼女の前で宣言した自分の

言葉が、まだ彼女に逢おうと思ふ望みに強く釘を打ちつけてしまつてゐるのに気がついた。彼は急に力が脱けて淋しくなつた。

「いやいや、俺はもう行くまい。郷里へ帰ろう。彼女が俺を愛してゐるからといって、俺が彼女を愛してゐるからといって、ただそれだけで彼女を奪ふ理由や口実にはならないではないか。彼は自分が妻に苦しめられたそれだけ本屋の主人の気持ちを感ぜると、今の自分の気持ちの長く続くことを願つた。そして本屋の主人に対して済まないと思ふ心が今までよりも一層強く動き出すと自分も世の中を汚してゐる多くの汚い心の者と同じように汚いのを知つて彼は憂鬱になつて来た。すると本屋の主婦が前のようには綺麗な者に見えなくなつた。

「お前までがなぜ、あんなことをしてくれたのだ。なぜ良人を瞞してゐるのだ！」彼は自分の頭の中に浮んでゐる彼女に叱るやうにそう言つた。

その夜彼は家へ帰つても妻の顔を見ないように氣をつけた。今までの経験から、妻を嫌う気持ちがあつても、妻の顔を見るとたちまち妻にとらわれてしまふ自分を知つていたから。ことに寢床を一つの室へ一つにするとなおいけなかつた。彼は寢床もその夜は別々の室へ敷かせて眠つた。次の日からも彼はずっとそうし続けた。そして郷里へひとり帰るにはどうすればよいかその方法を絶

えず頭に浮かべるようになったが、妻の方から別れ話を持ち出さないまでは、自分から言い出すことが彼として出来なかった。それには決断心の乏しい彼の性質も多少手伝つてはいたというもののそれよりも、彼はまだ妻から放れることの出来ない種々な感じ、全く捨てきれないものを感じていたから。妻としては辰子は無節操で、放縦で、わがままで淫奔で、彼のような臆病な小心な良人をやがて自滅さす種類の女であつたが、普通の女として見たとき彼女は、善良で快活で子供のように無邪気であつた。それが最も彼を牽きつけていた。出来ることなら、彼としては、彼女と別々の家に住んでいて、ただ逢いたい時に誰からも苦しめられずに二人で逢えるそういう生活がしたかった。それには辰子は最も適当で、そうして、もしそうすることが出来たなら、いつまでもそれが続き、そんな女であつた。

ともかく彼はそういう理由やそれから、すぐに行かれる同じ地に本屋の彼女がいると思うことなどで、浮き足でいながらも、ただ辰子を中心にしてぐるぐる廻い流れている日が続けているより仕方がなかった。これは彼にとつては二重に苦しいことだった。ことに本屋へ行かなくなつた今の場合、一層それは、彼を苦しめた。彼は暇があると散歩をした。そのつど彼は彼女が自分を愛していることを確信しているそれだけ本屋へ彼は行きたくなる誘

惑をしきりに感じたがようやくいつも耐えて来た。

ある日、病気で郷里へ帰つていた三島が二年ぶりに上京して来て彼のところへ来た。三島はまだ大学を卒業していなかったのの後一年学校へ通わなければならなかった。三島と彼とは前から親しかったし、それに、三島は下宿屋が嫌いだつたので、素人屋の見つかるまで、自分のところにいるようにと彼から薦めた。薦める前にも、何よりさきに、彼は妻の性質と三島とを考えないわけにはいかなかった。一体に彼の友達らは揃つて彼よりもずっと綺麗であつた。が、三島は特に立派な男であつたしそれにことに三島は彼の友達の中でも飛び放れて綺麗な男であつたし、妻とも初対面であつた。「危険だ！」と彼は理窟なしに思つた。けれども、そのとき彼はもう自分の臆病な警戒心には全く愛想がつきて来ていた。一人一人自分の友人に猜疑心を向けてかかる自分、何の謀計もない親しい者に絶えずびくびく脅やかされている自分、そうして、それらの友からただそれだけの自分の不純な気持ちからばかりで放れて行こうとし、放れて来た自分、それにまだ今、最後に一人残つた親友三島にも警戒を感じようとした自分を思つたとき、彼はもう自分を軽蔑する以上に、自分に対して反逆したくなつて来た。自分を滅ぼしてしまいたくなつて来た。

「今ごろ、素人下宿なんてあるものか。おれおれ。俺の

二階はまるあきなんだ。こ奴が少しまずいものを食わすかも知れないがね。」と彼は三島にそう言つて薦めた。そう言いながら彼はひとり、「これは面白いぞ。面白いぞ。」と自分に言つた。

三島はちよつと天井を仰いでみて、

「二階はどうなっているんだね。ひと間か？」と彼に訊いた。

「ひと間だ。俺らは下で充分なんだよ。二階を誰かに貸そうかとも思つていたんだ。」

そう彼は嘘を言いながら、自分に反抗したい気持ちが自分の言葉と調子とに何の障りもなくすらすらと出て来るとまします、ある痛快な快感を感じて来た。それに妻が茶を煎れながら、

「御馳走なんか私に出来ませんけれど、ほんとうに二階は使つたことがございませんの。」と傍から言つた。

「ずぼらじゃなけりや厄介になるんですがね。」と三島は言つた。

「もう私、馴れていますわ。良人の無精者つたらございませんのよ。」

「それじゃ二人も揃つたらなおお困りでしよう。」
「あら。」と妻は言つた。

彼は妻の顔を見なかったが、そのときの驚きを示した中に媚びを閃めかせている妻の表情を感じることが出来

た。するとまた急に彼は心の中に寒さを感じた。

三島はともかく荷物の着くまで彼のところにいることになった。彼は三島の荷物が着いても、まだ引きとめようと決心した。そして、事実そう実行した。もう彼はその時、覚悟を定めていた。何事が起つても妻一人を失うそれだけで済むにちがいない。それから起る後の苦痛や種々の混乱した事柄は自分一人でもなることだと彼は思った。彼は自分の暗い気持ちをなるだけ三島に感じさせないように気をつけた。妻に対してもいつもより快活に打ちとけるような態度をとつたが、しかしそれは妻の気持ちを自分の方へ引こうとする心算からではなく、自分の苦痛を、より少く感じるために赤の他人になつていたい気持ちからであつた。妻もそれを感じていたらしかった。そしてそれだけ彼女も復讐的な気持ちを加えて、彼の前で、一層前より激しい媚弄な態度を三島に示し出した。すると、彼の快活さもますます激しくなつていった。それは時には不自然なほど快活で、もっとも彼の快活さは最初から意識的なものであるだけに不自然にはちがいがなかった。が、それでも、彼は自分ながら自分たまたまなく不快になるほど、それほど放埒に快活になり出した。それが続いてゆくところまで行き続けると、急に今度は彼の妻に対する態度が三島の来ない前より一層冷めなくなつて来た。すると、妻の媚弄も少しやわら